

## 〈論文〉

三島由紀夫『潮騒』と『恋の都』  
 —— 〈純愛〉小説に映じる反ヘテロセクシズムと戦後日本 ——

武内 佳代

This article focuses on Mishima Yukio's two novels, *The Sound of Waves* (Shiosai, 1954) and *The City of Love* (Koi no Miyako, 1953-1954), both of which were written around the same time, and attempts to locate them as anti-pure-love fictions, that subvert romantic-love ideology. Furthermore, I reveal that their plots convey the situation of U.S. domination in postwar Japan even after the occupation had come to an end.

*The Sound of Waves*, which is usually regarded as canonical "pure love" text, in fact parodies the genre by paradoxically highlighting the fictionality of "pure love" as well as the "law" of the Emperor in the postwar era, and by excessively indicating the heterosexual "pure-love." *The City of Love* also foregrounds the fictionality of the "happy ending" of "pure love" through the ironical depiction of a patriotic heroine who inevitably adjusts herself to the United States.

Both works situate the shadow of U.S. domination as a destroyer of the sweet illusion of the romantic-love ideology and the "law" of the Emperor in postwar Japan. This article argues that Mishima Yukio turned a critical eye on the Emperor and Japan, both of which aligned with the United States after the World War II.

キーワード：純愛小説、反異性愛主義、戦後日本、三島由紀夫、『潮騒』

### はじめに——パロディとしての『潮騒』

「人口千四百、周囲に一里に充たない」歌島で暮らす漁師久保新治は、海女の母親と弟を養う18歳の実直な若者である。ある日、彼は、養家から島に呼び戻された、船主である宮田照吉の娘初江と出逢い、二人は恋に落ちる。入婿候補の安夫の嫉妬、千代子の横恋慕、照吉の反対といった数々の困難はあるものの、結局は、照吉の所有船における新治の大活躍によって、二人は晴れて婚約を認められ、物語は幸福のうちに幕を閉じる。

そうした典型的なハッピーエンディングの純愛小説、それが三島由紀夫の書き下ろし長篇『潮騒』（新潮社、1954）である。

のちに学校教科書にも収録された本作は、刊行されるや、たちまちベストセラーとなり、刊行後4ヶ

月にして映画化もされた。だが大衆の圧倒的な支持とは異なり、同時代評は賛否両論で、批判も著しかった<sup>1</sup>。興味深いのは、そうした落差に対する三島自身の反応である。

後年、その「通俗的成功と、通俗的な受け入れられ方」に「冷水を浴びせ」られたと回想したように（三島 [1963] 2003、pp. 319-320）、大衆の歓迎は必ずしも三島を喜ばせるものではなかった。三島は本作で、自身にとって初の文学賞受賞にあたる第1回新潮文学賞を受賞したにもかかわらず、こう受賞のコメントを残している。

「潮騒」は気持よく書いた作品であるが、それほど野心作とか、苦心の作とかいふのとはちがふ。それでいて、こんなに多くの読者から愛された小説は初めてである。愛されることはうれしいことであるが、またこの次には、いやがられ憎まれる小説を書かなければ自分の中でバランスがとれない。（三島 [1955.1] 2003、p. 409）[傍線部引用者、以下同様]

次回作では「いやがられ憎まれ」たくなるほど、「通俗的成功」を嫌ったのはなぜか。後年の対談で三島は次のように語っている。

私の「潮騒」という小説を武田泰淳が非常に不健康だと言ってくれた。これはいい批評だと思います。というのは漁村の青年男女が恋愛をして、村のモラルのなかに包まれて結婚する。なんら反抗もなければ反逆もない。不健康なんです。それは武田さんの持っている感覚では、非常に正確な批評だと思いますね。（三島 [1968] 2004、p. 186）

「不健康」という武田の批評<sup>2</sup>への賛同が面白い。なぜなら、『潮騒』執筆のころ、三島は川端康成に宛てて、「『禁色』の次の、ああいふデカダン小説とは正反対の健康な書下ろし小説を書く」（三島 [1953.3] 2004、p. 274）、あるいは、「男色は書きただけ書きましたから、これで打切り、今後は健康な小説ばかり書かう」（三島 [1953.10] 2004、p. 275）などと書き送っていたからだ。とはいえ、これは決して矛盾ではない。そのことは、近年見つかった未使用の単行本用のあとがきから裏付けられる。

「禁色」二部作によつて、既成道德との対決の困難を味はひつくした私は、今度は悪魔が仏陀に化けるやうに、私自身、私の敵手である既成道德に化け変つて、小説を書かうと発心したのである。そこでこの小説は反ロミオとジュリエットのなものであり、既成道德の帰依者たち乃至は適応者たちの幸福な物語であり、どの一頁にもデカダンスの影もとどめぬ小説であり、考へられるかぎりの「作者不在」の小説たるべきであつた。（中略）私はとにかく既成道德に化けたのであるから、既成道德の善さと美しさとしか語らうとしなかつたのである（三島 [不明] 2003、p. 274）

つまり『潮騒』は、『仮面の告白』（1949）、『禁色』（1951-53）で対決した〈健康〉な「既成道德」、すなわち異性愛主義に、今度はあえて「化け変つ」た極めて欺瞞に満ちた企てなのである。そして、そのように「悪魔が仏陀に化け」た、まさにその明証こそ、異性愛を「幸福な物語」として「善さと美しさとしか語らうとしな」い身振りの過剰さであることが明かされている。三島は、「既成道德」として

の異性愛神話を、純愛小説という形式を可能なかぎり誇大に模倣し賛美することによって、むしろ逆説的に、その〈健康〉に潜む〈不健康〉を露呈させようと企てたのだ。同性愛を前面に押し出した『仮面の告白』や『禁色』が異性愛主義との真っ向からの対決だとすれば、『潮騒』はパロディ戦略<sup>3</sup>を用いていわば裏側から対決を試みた作品に他ならない。その意味において本作は、川端宛書簡にあったように一見「健康な小説」でありながら、その実、「非常に不健康」な小説なのだ。こうした表象戦略は、既成のジェンダー規範を極端に模倣し演じる身体表象が、むしろ「模倣（反復）すべき形態から、つねにずれて」<sup>4</sup>しまうことにジェンダー概念の攪乱可能性を見出した、ジュディス・バトラー（Judith Butler）の模倣理論のそれに近いといっている。

しかし、これまで本作については、ごく少数の見解<sup>5</sup>を除けば、基本的に明るく健康的な純愛小説として論じられてきた。その要因は、ある同時代評が本作に「恋愛、というものに対する読者の側の最大公約数」を捉え（A 1954, p. 61）、のちに佐藤秀明氏が「愛はかつてかくもありえたであろうし、もしやどこかでありうるかもしれないという可能性を信じさせる力」を看破したように（佐藤 1991, p. 140）、その徹底した通俗性、類型性が、単に異性愛の批評的なパロディという解釈だけでは測りきれないあざとさを持つからに違いない。確かに、さきの川端に宛てた「健康」さのアピールを見る限りでは、三島は本作において、パロディ機能がはらむ批評性と馴致性との双方を相当したたかに跨いだことがうかがわれる。

ともあれ本稿では、以上のことを踏まえて、これまで看過されてきた『潮騒』の反純愛小説的な側面に改めて目を向ける。加えて、それと連繋しながら、どのように三島の戦後日本への問題意識が描き込まれているかも考察する。その際、本作と同時期に執筆された長篇『恋の都』を比較対照作品とし、当時の三島における異性愛規範および公的ナショナリズムに対する態度をより鮮明にしようと考える。

## 1. 折り重なるロマンチック・ラブ・イデオロギーと天皇の〈法〉

「初江！」 / と若者が叫んだ。 / 「その火を飛び越して来い。その火を飛び越してきたら」 / 少女は息せいてはあるが、清らかな弾んだ声で言った。裸の若者は躊躇しなかつた。爪先に弾みをつけて、彼の炎に映えた体は、火のなかへまっしぐらに飛び込んだ。次の刹那にその体は少女のすぐ前にあつた。彼の胸は乳房に軽く触れた。（中略）二人は抱き合つた。（第8章）

これは『潮騒』で最も〈健康〉的ともいふべき新治と初江のラブシーンである。この後、初江は「嫁入り前の娘がそんなことしたらいかん」と「道徳的な言葉」を発し、それに対して新治は、「道徳的な事柄にたいするやみくもな敬虔さ」から貞操を遵守し、「永い接吻」をするにとどめる。このように本作の純愛は、戦後近代家族の支柱である「セックスは夫婦に限定する」「貞操・純潔・一夫一婦」としての愛・性・結婚の三位一体、すなわちロマンチック・ラブ・イデオロギー<sup>6</sup>の共有を基調としている。新治はだから、婚前の純潔をこのように感じる。

充たされない若者を苦しめたが、ある瞬間から、この苦痛がふしぎな幸福感に転化したのである。（中略）すると新治は、この永い果てしれない酔ひ心地と、戸外のおどろな潮の轟きと、梢をゆるがす風のひびきとが、自然の同じ高調子のうちに波打つてあると感じた。この感情に

はいつまでも終わらない浄福があつた。(第8章)

このように、本作ではロマンチック・ラブ・イデオロギーという純愛の〈法〉は、殊更「幸福」「浄福」とされるが、果たしてそれは、「潮の轟き」「風のひびき」といった「自然の同じ高調子のうちに」感得される、歌島の「自然」に通じている。注目すべきは、これがさらに、「八代神社」に「敬虔な祈りを捧げ」た新治が「豊饒な自然と、彼自身との無上の調和を感じ」(第6章)、また、純愛を全うした二人がともに「神々の加護を感じた」(第16章)ように、この「自然」が「八代神社」の神の〈法〉と重ねられていくことであろう。

こうした歌島の神の介入がとくに際立つのは、第9章、安夫が初江を凌辱しようとする挿話である。深夜、水汲み当番の初江を待ち伏せしていると、「蜂の一疋」が安夫の手首を「力いっぱい刺し」、「安夫はわれながらぶざまだと思へる恰好で初江の前に姿を現は」してしまう。嫌がる初江を捕らえて「頬に顔をおしつけた」瞬間、「また蜂が彼の項を刺し」、さらに、「再びその稔りのよい体を苔の上に押し倒したとき、抜け目ない蜂は、今度は彼の尻にとまつてズボンの上から尻の肉を深く刺す。こうしてユーモラスですらある「気のきいた蜂」は、「救いの神」として三度も初江の純潔を守る。この挿話において、その「小さな金いろの羽搏き」が神聖さを暗示するだけでなく、都合の良すぎる救済の超現実性そのものが、神の介入を明示している。

さて、この歌島の神については、はやくは羽鳥徹哉氏が「伊勢にいる天照大神やそれに連なるこの島の神」と捉え(羽鳥 1993, p. 76)、それを受けて柴田勝二氏が、「八代神社」と伊勢神宮との具体的な関連を示しつつ、明治以降、天照大神が天皇家の皇祖神として国家神道で中心化されたことをふまえて、その歌島の神の〈法〉が天皇の〈法〉にまで繋がると読み解いた。柴田氏はそれゆえ、本作の純愛が「〈日本〉という国」をも表象するとしている(柴田 2001, pp. 227-228)。そのような視野に立てば、第11章で、まるで天啓を得たかのごとく新治らの恋の支持者へと心を転じた千代子の耳を領すのが、「お伊勢まわりの舟」の「ふしぎな歌声」なのは頷けよう。歌島の神の〈法〉が、伊勢神宮を経由して、天皇の〈法〉にまで延びるとする読みは、決して飛躍ではあるまい。

ところで、こうした婚前の純潔を保持する〈法〉は、古来より歌島にあったものではなく、むしろ戦後もなく文部省が推進した純潔教育によっているという指摘がある(九内 2006, p. 23)。それは、作中の世代間格差からも裏付けられるのではないか。

歌島のモデルとなった神島には、旧来の婚前交渉を促進させる「寝屋」「寝宿」などと呼ばれる若い男女の合宿制度が長く残っていたことで知られる(柴田 2001, p. 233、九内 2006, p. 26)。第3章では、「むかし「寝屋」と呼ばれてみた若い衆の合宿制度」が今は「青年会の例会」になっているとされ、新治はそこへ通っている。青年会では、海の仕事や村の年中行事ばかりでなく、「まじめに教育や衛生」についても「論議が闘はされ」ており、それらを通して歌島の青年たちは、「公共生活につながつてみると感じ、一人前の男が肩を担ふべきものの快い重みを味はふ」。なかでも「衛生」は、「衛生講話を校医に頼」もうと提案されるほど熱心に扱われている。「衛生」とは戦後の衛生教育を指しているが、これは、現在の保健教育にあたるもので、1958年の学校保健法の制定まで、終戦直後から衛生管理とともに健康や性に関する教育として各学校機関に普及していたことで知られる(和泉 1965, pp. 46-48, 文部省 1973, pp. 305-318、高石 2003, pp. 7-8)。当時それと同時的に学校のみならず各地の青年団へも周知徹底の通達がなされていたのが、純潔教育だった<sup>7</sup>。したがって新治ら戦後の若者世代の大半が、



学校や青年会での「衛生」を通して当時の純潔思想を〈常識〉として内面化していたことは想像に難くない<sup>8</sup>。

たとえば、第7章で、安夫の売笑行為について、「ふつうの農漁村なら、安夫が女を知つてゐることは、自慢話の種になる筈だったが、清浄な歌島では、彼は固く口をつぐみ、こんな若さで偽善者を気取つてゐた」とあるのは、歌島の青年会においていかに純潔教育が叫ばれていたかを証拠立てるものと読み直せる。さらに、「志摩の老崎の海女のところで」で養育され、そもそも歌島育ちでない初江が、新治と純潔思想の規範を共有することは、若者世代への純潔教育の浸透のほどを物語るだろう。

翻つて、初江の父照吉は、新治と初江の婚前交渉の噂には激高するものの、入婿候補と定めた安夫の強姦未遂については極めて寛容な態度をみせる（第11章）。照吉の新治への怒りはだから、あくまで自分を出し抜いたことへのそれにすぎない。一方、新治の母親にしても、亡夫への貞操を固持するものの、「若い者の色事に関する寛大な見解」（第10章）の持ち主であり、ほかの母親たちもまた、「女教師に子供をませた」教師を「教頭代理まで進」ませる寛容さを示す（第7章）。つまり彼らは、戦後の純潔教育世代に対する、いわば過去の「寝宿」世代にほかならない。

このように、歌島の神の〈法〉として新治や初江が内面化しているロマンチック・ラブ・イデオロギーは、戦後の若者世代を支配するものとしてあり、その意味では極めて戦後的な〈法〉と言い換えられる。前述のとおり、そうした神の〈法〉が天皇のそれとして読めるならば、すなわち本作の純愛の顛末とは、天皇の〈法〉が戦後においていかにあるか、を寓意しうるのではあるまいか。

それは、たとえば戦後の天皇一家が「貞操・純潔・一夫一婦」を旨とした近代家族の模範的表象を頑なに保持してきたことを考えれば、容易に連想されうる。加えて、戦前にはじまる純潔教育が、戦中は「国家目的に合致した」「性道德の涵養」を施し（田代 2003、p. 151）、戦後も引き続き、「風俗対策」などで性解放を抑制しつつ（田代 2006、pp. 26-32）、近代家族形成に寄り添った性道德として延命したことを想起したい。つまり戦後のロマンチック・ラブ・イデオロギーは、そのように戦前戦中から国家プロジェクトとして引き継がれた点において、戦後の天皇制と近似性をもつのだ。そうだとすれば、本作の戦後の若者世代による純愛の貫徹は、戦後における天皇の〈法〉の復権を暗示することになるだろう。だが先走っていえば、相対化されるものとして描かれた本作の純愛には、その破綻の予兆が根を張っている。

## 2. 戦後メディアという米国の影、伝承というメタテキスト

再び安夫の強姦未遂の挿話に戻ろう。改めて問題にしたいのは、初江の純潔が、一体どのような欲望から守られたかである。

初江は身をもがいて逃げようとする。安夫は逃がすまいとする。（中略）安夫は都会の三文雑誌によく出てくる、「征服された」女の告白といふやつが好きで仕方がない。言ふに言へない苦悩を与へてやるといふことはすばらしい。（第9章）

このように、新治への嫉妬を発端としながらも、実のところ安夫に強姦の欲望を備給しているのは「都会の三文雑誌」という戦後メディアなのである。また、横恋慕する千代子にしても、「東京で見た

映画や小説の影響もあつて、『僕はあなたを愛してゐます』といふ男の目の表情を一度でも見たいと思ふ」(第7章)のであり、その愛の欲望は映画や小説といった戦後都市のメディアによって(再)生産されている<sup>9</sup>。

終戦直後からの都市部における性解放や自由恋愛の気運が、私娼や性風俗のみならず、カストリ雑誌や映画といった大衆メディアを通じて高まったことは言を俟たない。たとえば、1946年以降、性を扱ったカストリ雑誌が公然と書店に並び、50年代半ばに週刊誌が台頭するまで、数百種が店頭を賑わした。当時のGHQが、「SCREEN (映画)、SPORTS (主としてプロ野球)、SEX (性の解放) によって、日本人の軍国主義的な体質を緩和しようとして」(高倉 1998、p. 673) いたとするなら、すなわち性解放の気運とは、ある意味GHQの民主化政策の賜物だったと言い換えられる。

そうした気運と照応して、本作の性愛の要素は、基本的に都会へと追いやられている。たとえば、第8章、「愛する男に手ごめにされた学友に関する噂話を思ひ出し」、新治と初江の仲を勤めて婚前交渉の噂の発信源となる千代子は、東京の大学に通っている。また、第13章、「小学校の校長であつたのが、女で失敗してこんな身分になつた」「年老いた行商」も、都会からの来訪者である。彼ら戦後都市文化に触れる者たち、そしてかたや歌島の〈法〉の内にある新治たち、それらの恋愛の手つきは、露骨なまでに対照的に描かれる。

都会の少年はまづ小説や映画から恋愛の作法を学ぶが、歌島にはおよそ模倣の対象がなかつた。そこで新治は観的哨から灯台までのあの貴重な二人きりの時間に、何をなすべきであつたか、思ひ出しても見当がつかなかつた(第5章)

このように、奇しくも『潮騒』の戦後空間においては、天皇の〈法〉の隠喩としての純愛と、GHQによる米国支配的な戦後メディアが発動する性愛という、二つの〈愛〉のパラダイムが相剋しているのである。

柴田氏が論じるように、第14章で、神の加護を受けた新治が沖縄で嵐に打ち克つ挿話には、戦後日本が米国支配に打ち克ち、「〈日本〉の同一性の在り処を浮上させようとする」寓意性がとくに色濃い。それについて柴田氏は、「三島の念頭にあつた新しい日本のあり方は、明らかに対米意識から断ち切れ、真の〈独立〉を勝ち得ること」であると捉え、また、それが「日本の神—天照大神—に支えられることによって成就される」ことに三島の欲望の様態を読み取る(柴田 2001、p. 231-233)。確かに、そのような寓意性それ自体は頷ける。だが繰り返せば、新治の純愛の勝利があくまで一種の戯画として描かれたことを忘れてはなるまい。とりわけ次に視る、インターテキストとしての伝承の書き込みが改めてそれを気づかせてくれる。

第12章、本作の語り手が唐突に語る「デキ王子の伝説」は、「古い昔にどこかの遥かな国の王子」が歌島に流れ着き、「島の娘を娶り、死んだのちは陵に埋められた」こと以外、全く「模糊とし」た伝説とされる。語り手はさらに、「王子の生涯が、物語を生む余地もないほどに幸福なものだつた」とし、「幸福と天龍は彼の身を離れなかつた」ために「その屍は何の物語も残さずに」終わったことを強調する。のちに初江が「神のお告げ」として見た、「新治はデキ王子の身代りであることがわかり、めでたく初江と結婚して、珠のやうな子供が生れるといふ夢」が知らせるように、語り手——この場合、より作者に近似する語り手——は、この「デキ王子の伝説」というメタテキストによって、間違いなく『潮

騒』の幸福な純愛ストーリーの、後世に「何の物語も残さずに」終わる無力さを明示しようとしている。本作の純愛に対する三島の批評性は、自作解説などの外部情報ばかりではなく、このように作中の語り口にもはっきりと見て取れる。

### 3. 純愛と戦後日本への冷笑

作者の純愛に対する批評的距離は、結末でも不穏な予兆となってささやかに表われている。

少女の目には矜りがうかんだ。自分の写真が新治を守つたと考へたのである。しかしそのとき若者は眉を聳やかした。彼はあの冒険を切り抜けたのが自分の力であることを知つてゐた。  
(第16章)

この結末における新治と初江の心のすれ違いについては、「めでたし、めでたしで終わる物語世界を相対化しかねない要素」(杉本 1990、p. 357)であることから、作者が「くもりなき恋愛小説完結に満足できなかったということの表象」(花崎 1998、p. 33)と見做されてきた。さらに有元伸子氏は、「女は男との関係に自足して島に残り、男は自分の力を信じて外へ目を向ける」という乖離を読み取り、その乖離にこそ、純愛に隠された男女の非対称的なジェンダー秩序が表象されていると論じる(有元 2006、p. 46)。そのようにジェンダーの非対称性をも露呈させるとすれば、この結末の綻びは、〈純愛〉というロマンチック・ラブ・イデオロギーの破綻ばかりでなく、より正確には、その〈純愛〉に潜むヘテロセクシズム、すなわち婚姻制を前提とした「性差別と異性愛主義という二つの言語のもつ抑圧形態」<sup>10</sup>の破綻をも表象することになる。

実はそうしたヘテロセクシストな純愛/結婚の破綻の可能性は、恋のはじまりのほうですでに揺曳している。第6章、初江は灯台長官舎で新治の訪れを待ちながら、「島につたはる盆踊りの伊勢音頭」をこう歌う。

箆筒、長持、挟み箱、/これほど持たせてやるからは、/必ず戻ると思ふなよ。/まをし、母さん、そりや無理だ、/東が曇れば風とやら、/西が曇れば雨とやら、/千石積んだる船でさへ、  
/追風かはれば、ヨーイソラ、出て戻る。(第6章)

こうした出戻りの歌を、夫婦仲の良い「灯台長の奥さん」が「島へ来て三年にもなるのにおぼえない」のに対し、初江は来島早々に覚えて明朗に歌う。まさにそのとき、新治の訪れがある。この挿話は、結末の綻びと響き合いながら、将来初江が、新治を家長とする家を飛び出して養母の元へ戻るかもしれない、そうした不吉な予兆をはらんでいる<sup>11</sup>。とりわけ「島の労働と意志と野心と力との、権化」である封建的かつ家父長的な照吉から「男は気力や」「新治は気力を持つとる」と見込まれた新治との結婚、それが実母のいない初江に甚だしいジェンダー抑圧をもたらすことは目に見えている。この入婿結婚はだから、照吉と新治の結託の契約、すなわちホモソーシャルな〈結婚〉に他ならない。このように、結末の齟齬と初江の歌とは、互惠的な形で、『潮騒』の純愛に潜む家父長的なホモソーシャルを不吉に暗示している。加えて、初江の歌った伊勢音頭が伊勢信仰とゆかりが深い(本田 2005、p.137, p.142)こ

とを想起すれば、そうした純愛の不吉な局面は、戦後天皇の〈法〉の危うさとも近接しはしまいか。

とりわけ暗示的なのは、新治の弟宏の存在である。第5章の墓参りの際、宏は亡父に関する「兄と母との対話をよそに、十日後に迫った修学旅行を夢みて」おり、そこでは新治に比べて「B24」の機銃掃射で戦災死した父親の記憶が浅いことが示される。こうした兄弟の記憶の落差は、さらに島を出る体験において歴然とする。

より戦争の記憶を残す新治は、初めて遠洋に出たとき、那覇で「進駐当時の米軍」が「のこらず焼き払ってしまった」「荒涼とした島の禿山」を見、また、「戦闘機の練習の爆音」や「軍用自動車」に充ちた島に、「米軍家屋は鮮やかな瀝青の光沢を放ち、民家は打ちひしがれ」るのを目撃する（第14章）。一方、修学旅行で初めて島を離れた宏は、京都の「名所旧蹟」よりも「西部劇の映画」の方に夢中になって帰島する（第9、10章）。時代設定をおよそ執筆年とみれば、このように二人が垣間見るものは、1951年の対日講和条約および日米安全保障条約調印ののち、52年にGHQが撤退したものの、都市部におけるメディア文化の普及と沖縄における軍事支配の形でなお米国の〈占領〉が続いていること、そのように引き延ばされた〈占領〉の明暗をそのまま映し出していよう。

そして、米国支配への抵抗を暗示する沖縄での新治の活躍に対して、第10章、宏は帰島後、「西部劇をまねる新しい遊び」を仲間たちとはじめてしまう。メディアによる文化支配は、安夫や千代子ばかりでなく、宏ら年少者たちをも容易に馴致させていくのである。それは、あたかも戦後社会において新治がいかに抗おうとも、歌島の島民たちもまた、米国の影響から不可避だと言わんとするかのようだ。

このように視てくると、神の加護を信じた新治と初江の純愛が、歌島においてでさえ、いかに限定的なものであったかが露となる。事実、新治は結末近くでこのように実感している。

今にして新治は思ふのであつた。あのやうな辛苦にもかかわらず、結局一つの道徳の中でかれらは自由であり、神々の加護は一度でもかれらの身を離れたためしはなかつたことを。つまり闇に包まれてゐるこの小さな島が、かれらの幸福を守り、かれらの恋を成就させてくれたといふことを。（第16章）

「闇に包まれ」た「小さな島」において、「一つの道徳の中」で成就された「かれらの恋」。語り手が新治の思いをそのように換言するとき、そうした表現は、新治たちの純愛がごく局所的であり、あたかもユートピア幻想にすぎぬような皮肉な響きをもつ<sup>12</sup>。それは、「神々の加護」、すなわち天皇の〈法〉もまた、ひとつの偏狭なイロニーにすぎぬことをも語っていよう。このような語りと響き合いながら、純愛のユートピアを囲繞する米国の影というリアリティ、そして結末のユートピア崩壊の予兆は、戦後における天皇の〈法〉の局所性、幻想性を痛烈に打ち出すのである。

なるほど、ここまで読み解いてきたすべてを作者の意図とは見做せまい。だが少なくとも『潮騒』は、純愛のパロディ化にことよせて、純愛というユートピア、すなわち天皇の〈法〉というユートピアから一歩出れば露呈する、明暗併せもった米国支配という戦後的現実を鋭利に表象するテキストなのだといえる。ここには、公的ナショナリズムとは距離を置きながら、当時の戦後日本の現実を冷徹に見据えた三島由紀夫の冷笑的眼差しの介在を指摘できるのではないか。



#### 4. 都会版『潮騒』としての『恋の都』——遅れて来た結婚、遅れて来た〈戦後〉

そのように純愛小説に戦後日本の問題を織り込む三島の態度は、さらに『恋の都』（『主婦の友』1953.8～1954.9）において顕著となっている。

これまで『潮騒』の比較研究においては、発表時期の近さから、戦後混乱期の東京を舞台に一青年の背德的欲望を描いた『鍵のかかる部屋』（『新潮』1954.7）が、〈健康そのもの〉である『潮騒』の反対物として取り上げられてきた（日野 1955、p. 211, 奥野 1993、pp. 297-321, 九内 2006、pp. 26-28）。だが、『潮騒』の取材が1953年3月に始まり、擲筆が1954年4月4日であることを考えれば、その執筆時期は、『恋の都』の方がより重なりをもち<sup>13</sup>、また、両作品とも時代設定をおよそ執筆時に据えている点でも共通している<sup>14</sup>。何より、婚約をゴールとする単線的な純愛小説であるという共通性が際立つ。にもかかわらず、『鍵のかかる部屋』にばかり目が向けられてきたのは、『恋の都』の発表媒体が婦人雑誌だったためではないか。以下、あらすじを辿りながら読解を試みる。

「潤んだ美しい目と、誘ふやうな少ししどけない唇」をもつ魅力的な女主人公、朝日奈まゆみは、在日米兵相手のジャズ楽団「シルバア・ビーチ」の敏腕マネージャーである。26歳の彼女が、バンドのメンバーから「聖処女」と仇名されるのは、どんな男性にも振り向かず、とくに米国人男性の誘いを悉く突っぱねてきたからだった。

まゆみは英語はすばらしく出来、外人との附合もうまかつたが、奇妙にアメリカ人を毛ぎらひしてゐた。こんなに一から十までアメリカナイズされた職業の中にあつての、彼女の国粹思想は、みんなの不審の種子であつた。（p. 391）

まゆみの烈しい反米、国粹思想は、今は亡き初恋の丸山五郎の感化によっている。終戦の前年に恋仲となった「過激な右翼団体」の塾生五郎は、「極端な熱狂的な国粹思想」の持ち主だった。半年ほど「あひびきを重ねた」のち、「やつと二人は高い檜の樹のかげで最初の接吻」をするが、直後、まゆみは疎開することになる。その別れ際、まゆみは20歳の五郎と「戦争が日本の大勝利に終る日に結婚しよう」と誓いを交わすが、終戦後、疎開先から戻った彼女は、五郎が敗戦とともに切腹死したことを知る。それから八年間、病身の父親のいる一家の家計を担いながら、米国人男性から貞操を守ることで、米国への復讐を続けていた。

『恋の都』は、こうしたまゆみの暗い過去を底流させながら、一方で、米国人マネージャーの姦計からの脱出劇、ドラムの工藤と大物政治家の娘安子との恋愛騒動、ピアノの松原による不倫の末の心中未遂、大ジャズコンサートでの大乱闘、二枚目映画俳優をめぐる親友の歌手マリ子との衝突といった、恋と冒険と友情の空騒ぎが展開されていく。そのような物語においてとりわけ目を惹くのは、「東京租界といはれ、植民地都市といはれる」「ヌエのやうな都会」を描くという作者の宣言どおり（三島 [1953] 2003、p. 136）、GHQ撤退から1年後の東京における「米国人を前にした日本人の片身の狭さ」（千野 2008、p. 311）であろう。

たとえば、まゆみのジャズ楽団が米国人オーナーに雇われ、米兵を主な客にしていること。さらには、商事会社社長の大槻に監禁された楽団員の松原を救い出す挿話がそれをよく物語る。その救出劇において、まゆみは、「口髭をたくはへ、いかにも正義派的」な「恰幅のよい」米国人男性マッシュウズの威勢

を借りて大槻をたじろがせ、松原を救出する。その直後、マッシュウズから食事に誘われたまゆみは、こう思っている。

まゆみは今日自分のやったことが、日本政府みたいな遣口だと思つたし、マッシュウズ氏はマッシュウズ氏で、アメリカ人一般の例に洩れず、MSA 式なやり方だな、とをかしく思つた。(p. 460)

MSAとは、相互安全保障法 (Mutual Security Act) の略称であり、米国が1951年に制定した、軍事援助受入国に対して自国と自由世界の防衛能力増強を義務づけた協定である。日本政府は1954年5月に、米国からの経済援助などを盛り込んだMSA協定を正式に結び、それを受けて同年7月には保安隊を自衛隊へと改組して防衛力漸増を実施した。まゆみは、そうした日米間協定を思い出して、自分が米国人男性の威を借りたことを「日本政府みたいな遣口」、そして、その見返りを求めたマッシュウズの出方を米国の遣口だと感じたのである。

ここで注目すべきは、まゆみの在り方が戦後の「日本政府」と寓意されていることだ。オリエンタリズムの定石どおり、帝国 (西洋) / 植民地 (東洋) の関係がジェンダーの非対称性として表象されているこの挿話には、GHQ撤退後の戦後日本がまだ米国の〈植民地〉であることが前景化されている。そうであるならば、当然まゆみによる貞操の死守は、個人的な復讐劇を超えて、さきの『潮騒』の沖縄での挿話に視られたような、戦後日本における米国支配への抵抗そのものの寓意と読み解かれなくてはなるまい。

まゆみが下心のある米国人マネージャーから身を守りつつ、見事に賃上げ交渉をまとめたときの男性楽団員たちの反応は、それを端的に示す。

この話は、十万円昇給の報告より、実はもつと深く、若い楽団員たちを喜ばせ、元気づけた。かれらのどの一人も、そのとき、自分たちのまゆみに対する信頼が、マネージャーとしての手腕に対する信頼といふよりむしろ、彼女の清らかさに対する信頼であることを知るのであつた。(p. 435)

このように、まゆみによる貞操の死守という占領国への抵抗こそ、彼ら敗戦国の男性を「喜ばせ、元気づけ」る。彼らの潜在的期待に添うように、日々「そつと皇居のはうへ目礼」し、「戦争が日本の大勝利に終る日に結婚」する誓いを胸に五郎の「甲合戦」を続けるまゆみにとって、いまだ戦争は終わらない。彼女のイマジナリーな領土では、いまなお戦中の天皇の〈法〉は命脈を保つのである。このように『恋の都』では、『潮騒』に比べて、純愛と天皇の〈法〉との連繋や、そうしたものと米国支配の影と対立関係がより明瞭に描かれていく。

だがより重要なのは、まゆみが英語に長け、ジャズを愛し、米国人と親しくすること、つまりその意味で、彼女が米国とごく親密な関係にあることだろう。たとえば、さきのマッシュウズの助力を得た挿話が、日米安保条約やMSAといった戦後の日米協力関係そのものを表象していたように。

こうしたまゆみの不穏な要素は、五郎との再会で極点に達する。終戦直前に密かに上海に渡っていた五郎は、戦後、紆余曲折を経て米国のスパイとなり、いまや米国籍を取得して「フランク・近藤」と改

名していたのだ。

あの五郎さんが半分アメリカ人になつてゐる！ あれほど国粹思想にこりかたまり、私に強い確信を吹き込んだあの人が！……さうだわ、私はあの人の亡きあと、まるで大事な遺産のやうに、あの人の思想を奉じてきた。今の世では時代おくれのあの思想は、いつも私の生きる糧だった。天皇陛下への絶対の愛、日本人としての絶対の矜り、理窟はどうあらうと、私は五郎さんの肉体を抱きしめるやうに、あの人の思想を抱きしめて来たんだわ。(中略) 皮肉にもアメリカ人たちの真只中で生活しながら、女の弱い力で、いつも皮肉な反抗をたくらんでゐた。私は五郎さんを殺した屈辱的な敗戦を決して忘れなかつた。それ以後、私は一度もアメリカに負けなかつた自信がある。(p. 580)

愕然とするまゆみに対し、五郎は結婚して米国で暮らそうと提案する。言うまでもなく、まゆみにとって、この結婚は米国人男性に自らの性を奪われることを意味し、それは彼女の心内において〈日本〉の敗北を意味する。だが、純愛を全うさせるには結婚するより他に道はない。葛藤の末、まゆみは「愛の裏切りでもあり愛の成就でもある」結婚を承諾する。と同時に、「天皇陛下への絶対の愛、日本人としての絶対の矜り」という「生きる糧」を喪失し、本当の〈敗戦〉を迎えるのである。注目すべきは、そうした承諾の直前、懊悩する彼女が、看板に「男女の荒々しい抱擁を亘がい」た西部劇を観ることだろう。その姿は、『潮騒』において、西部劇に夢中になった宏や、都市メディアに恋愛という欲望の形を教わった安夫や千代子といった、米国の影への順応者たちと重なる。

実際そのことは、結末を締め括るまゆみのプロポーズへの返事、「イエスですわ」によく表われている。英語混じりの承諾をするまゆみには、米国を受け入れて〈敗北を抱きしめ〉た<sup>15</sup>当時の戦後日本の趨勢をそのまま透視することができよう。

ところで、これまで終戦直後のマッカーサーと天皇の会見写真に指摘されてきたように、メディア表象において米国は、戦後天皇に女性ジェンダーを配すことで、占領国(戦勝国)/被占領国(敗戦国)の関係をジェンダーの非対称性に隠喩化して示すことがあった(北原 2001, pp. 236-239)。そのようなジェンダー配置の比喩を念頭に置けば、五郎のプロポーズを英語混じりで受け入れたまゆみは、米国の救済によって存続した、矛盾に満ちた戦後天皇それ自体の表象であるとも言い換えられる<sup>16</sup>。ただし、そうしたまゆみの承諾は、「感情をまじへないはつきりした声」でなされており、そのあたかも交渉事に臨むような身振りは、まゆみの諦念のみならず、作者の諷刺的眼差しをも滲ませている。

このように『恋の都』は、純愛を結婚へと実らせるいわば都会版『潮騒』ともいべき純愛小説でありながら、明らかにそれからずらされている。とくに「[国家]と[処女]」の問題を前面化する本作では(千野 2008, p. 314)、純愛におけるジェンダーの非対称性に戦後の日米関係のそれを重ね合わせることによって、純愛という名のヘテロセクシズム、すなわち婚姻を前提とする異性愛主義におけるジェンダーの抑圧構造そのものが可視化されているのである。それゆえ、本来純愛にとって最高のハッピーエンディングであるはずの婚約が、主人公にとって純愛の挫折をも意味するという皮肉な結末は、『潮騒』と同様、ロマンチック・ラブ・イデオロギーに対してばかりでなく、ジェンダー格差から成るヘテロセクシズムそのものに対する痛烈な批判と読み取れる。

純愛小説のフレームを借りながら、それがあからさまにずらされた『恋の都』。それは純愛小説の一

つのパロディに他なるまい。その意味で、本作はむしろ反<sup>アンチ</sup>純愛小説と言ったほうが正しい。そして前述のように、そうした歪んだ〈純愛〉の様相は、米国支配下にある戦後の日本と天皇の様態を二重写しにするのである。このような仕掛けには、戦時の国粹主義に対する、そして、米国と手を組んだ戦後日本および戦後天皇の在り方に対する、『潮騒』と同様の鋭利な諷刺が映じていよう。

## おわりに——反純愛小説としての〈純愛〉小説に映じるもの

改めて『潮騒』と『恋の都』を比較しておきたい。

前述のように、『潮騒』の新治の信仰は、伊勢神宮の天照大神を經由して、天皇という〈法〉にまで延長可能な、いわば国粹思想を嗅ぎとれる種類のものとしてあった。他方、『恋の都』の五郎の師事していた右翼団体の塾長宮原は、「毎晩夢でお伊勢様へ参詣してる」と噂される「神がかりみたいな男」(pp. 480-481)であり、それゆえ五郎の熱狂的な国粹思想もまた、天照大神を經由している。このように、戦後の新治と戦中の五郎との間には、隣接性を視ることができるのである。

とはいえ、結末において「一度も神々を疑はなかつた」新治と、すでに〈神〉を捨てた戦後の五郎とは、全く対照的な形象をなしているといっている。この対照はもちろん、彼らと婚約したまゆみと初江にもそのまま当てはまる。つまり三島は同時期に、戦後の離島と都市とを舞台として、全く相反するナショナルなものへの態度を、二つの〈純愛〉小説に描き込んだのである。

だが、『潮騒』は、神と連繋したヘテロセクシストな〈純愛〉を過剰なまでに差し出すことで、逆説的に、純愛なるものと天皇の〈法〉との戦後における虚構性を二つながらに示そうとしており、一方、『恋の都』は、ヘテロセクシストな〈純愛〉の末路を皮肉な形で差し出すことで、同様の虚構性を示そうとした作品であった。それらはともに、戦後における純愛と天皇の〈法〉という甘美な幻想を粉碎するものとして、米国支配という明暗併せもった同時代的な現実を表象していたのである。とりわけ注目すべきは、そのような米国支配の明部暗部に対する両作品に共通した身振りだろう。沖縄や日本人女性に対するいわばコロニアルな欲望という暗部においては、それに抵抗する新治やまゆみが配置されつつ、一方で、西部劇やジャズの流行という明部にはそれに無邪気に心惹かれる新治の弟やまゆみらが配置される。このようなダブル・スタンダードには、戦後の米国支配に対する作者の、あるいは当時の日本社会の、リアルな<sup>アンビヴァレント</sup>愛憎併存の感情そのものを透視できるのではないか。

以上のように、一見通俗的な『潮騒』と『恋の都』という二つの純愛小説を並べてみると、1953年から54年にかけての三島由紀夫が、裏側から純愛小説の蹉跌を試み、さらにその試みにおいて日本および天皇をめぐる米国支配の戦後的現実を冷笑的に写し取り、織り込もうとしたことが明らかとなる。加えて、純愛の破綻がとくに、『潮騒』では新治と照吉の〈健康〉的な結託、また、『恋の都』では米国人男性と五郎との結託といった、やや露悪的な男性同士の絆によって予兆されるそれぞれの結末、それは両作品における、家父長制下の異性愛主義を下支えするホモソーシャリティへの批判的<sup>アンチ</sup>眼差しの共有をも指し示している。換言すれば、二つの〈純愛〉小説は、究極の異性愛マトリクス<sup>17</sup>である純愛ロマンスの破綻を通して、単にロマンチック・ラブ・イデオロギーだけでなく、ヘテロセクシズムの正当性を裏書きするホモソーシャリティの〈不健康さ〉をも打ち出しているといえる。両作品はだから、ともに、異性愛主義の抑圧構造そのものを露呈させ、異性愛幻想を粉碎する、いわば反ヘテロセクシズムの批判的強度を有した作品と言い換えられるのである。



これまで『潮騒』の論評においては純愛小説としての通俗的な成功と作品解釈とが表立ってきた、と先に述べた。だが、『恋の都』についてはさらに、婦人雑誌という発表媒体と「人物描写も通り一遍で」「不自然さも目立つ」ドタバタ恋愛劇（油野 1976、p. 146）といった相貌とが相まって、研究の俎上にさえ載せられてこなかった。しかし以上のように視てくると、いま改めて三島由紀夫文学におけるジェンダー/セクシュアリティ表象およびナショナリズム表象の変遷を辿るうえで、そのような、いわば反純愛小説としての〈純愛〉小説を分析する意義は、決して小さくないに違いない。

（たけうち・かよ/お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

国際日本学専攻 博士後期課程3年）

掲載決定日：2008（平成20）年12月10日

## 注

- 1 たとえば、「つくりあげた牧歌調の弱さ」（無署名 1954、p. 5）、「アメリカ映画的な通俗」をはらみ「現実離れのした小説」（SUN 1954、p. 62）、「卑俗な神話的というより講談種の人情美談」（寺田 1954、p. 3）、「話が、最初から、あまりにまったく型どおり」で「三島の作品のなかでももつとも不出来」（中野 1957、pp. 80-81）などがある。これらの批判はすべて筋立てが通俗的、類型的であることに集中している。のちの、「神話、おとぎばなし、あるいは講談の親戚」（磯貝 1965、p. 117）、「純愛小説の剥製みたいなもの」（浅田 1988、p. 342）といった批判も同様である。
- 2 武田泰淳「小説案内（上）青春のモラル」（1954、p. 6）は、「いかにも健康そうな明るそうな人物と風景を描いた『潮騒』の執筆者としての三島の心理状態の方が、はるかに不健康」であり、「まにあわせの青春、でっぴあげた健康のにおいがする」と批評している。
- 3 ここで言うパロディとは、リンダ・ハッチオン（[1985] 1993、p. 16）の「類似よりも差異を際立たせる批評的距離を置いた反復」をさす。
- 4 竹村和子氏（2000、p. 66）は、リュス・イリガライ（Luce Irigaray）の模倣理論を批判的に摂取したバトラーの見解、すなわち、ジェンダーの行為遂行的な主体化の過程において既存の言説体系からの引用（模倣）が、現行秩序の再生産だけでなく、ときにパロディとして攪乱の契機にもなりうるという見解をこのように言い換える。
- 5 はやくは前掲（武田 1954、p. 6）をはじめ、日野啓三「三島由紀夫論」（1955、p. 213）が、「末世の現実の裏がえしであることによつて、痛烈きわまる作品」とした。他には、「現代の病を導入せず、完全にそれを排除したことによつて、この作品の書かれた時代をとりまく当時の時代の病の全貌を暗示」した可能性に触れたり（助川 1972、p. 119）、「通俗的道具立てをすべて駆使して、それをパロディの極限にまで追いつめ」た「明るい頹廢」を指摘した論考がある（松本 1976、pp. 120-123）。
- 6 上野千鶴子氏（1990、p. 532）の定義を受けて、赤川学氏（1999、p. 197）は、この「ロマンチック・ラブ・イデオロギー」という概念が、「夫婦和合の鍵はセックスにある」という言説と、「セックスは夫婦に限定する」という言説の合成であることを論じる。本稿では後者の意味で用いる。
- 7 田代美江子氏（2004、pp. 172-173）は、1947年1月に文部省が、「純潔教育の実施について」を通して、「男女青年団等の幹部講習、幹部会等に男女の交際・結婚その他の問題について研究させること」などを「強力に実行するように」都道府県に通達したことを紹介している。
- 8 衛生教育が性教育を含んでいたことは、原清『受胎調整の衛生教育テキスト』（[1952] 2003）といった教則本の存在からわかる。
- 9 こうした安夫や千代子について、「経験以前に既知の観念として所有し、あとからその過程をなぞっていく現代」の愛の形を読み取り、それを新治と初江の「何もないところからの模索」である古風な愛との対照物として捉える見解があるが（佐藤 1991、pp. 139-140）、本稿はとくに、そうした対比が戦後メディア受容の有無で表現されること

それ自体に注目する。

- 10 竹村和子氏 (1997、pp. 72-74) の定義による。
- 11 純愛の結実は、照吉一人の裁断によっているが、とりわけその裁断の言葉が、灯台長夫人や海女たちの沈黙のなかで発せられる部分には、照吉の強烈な家父長的姿勢が表出する。ここには、照吉に見込まれた入婿新治の将来の姿が映じていよう。
- 12 中島国彦氏 (1986、p. 65) は、引用部について、「闇に包まれてあるこの小さな島」という表現に『『潮騒』という作品世界そのもの』を捉え、「作者は『潮騒』の幕切れで、作中人物との距離を無視して、自分の思いのたけを述べようと」したことを指摘する。
- 13 『恋の都』連載開始月にあたる 1953 年 8 月の末に、三島は神島で『潮騒』の追加取材をしている。また、『恋の都』が連載とともに書き継がれていったことは、1953 年 10 月の川端宛書簡 (三島 [1953] 2004、p. 275) に、「[主婦の友] がいやでいやでたまらず」「いつそ「作者退屈至極につき連載中断仕候」といふ社告を出してもらはうかと思ひます」とあることからわかる。
- 14 『恋の都』では、モチーフとして、「一九五三年十月三十一日」(p. 495) と記載された切符が出てくる。一方、『潮騒』では、「父が戦争の最後の年に機銃掃射をうけて死んで以来、新治がかうして働きに出るまでの数年間、母は女手一つで、海女の収入でもつて、一家を支えて来た」(第 2 章) とあり、18 歳の新治が「落第を免かれて」「新制中学の卒業」(第 1 章) 後、すぐ漁夫になったことから、少なくとも 1950 年以降であることがわかる。
- 15 ジョン・ダワー ([1999] 2004) は、占領期の日本において政府のみならず民衆レベルにおいても米国の政策を受け入れたあり方を、このように表現している。
- 16 占領期前後の日米関係をジェンダー配置によって寓意した三島由紀夫作品としては、ほかに『暁の寺』(『新潮』1968.9-1970.4) が挙げられる。これについては拙稿 (武内 2008、p. 6・4) で論じた。
- 17 ジュディス・バトラー ([1990] 1999、p. 262 の原注 6) は、「身体やジェンダーや欲望を自然化するときの認識格子」として「異性愛のマトリクス (heterosexual matrix)」という語を用いる。バトラーによれば、これは、性別二分法的な「ジェンダーの理解可能性についての覇権的な言説 / 認識のモデル」を意味している。

## 参考文献

- A・K・7 (署名) 「新書 鮮かなギリシア的造型」『サンデー毎日』第 33 巻第 29 号 (1954.6.27) : pp. 61-62  
赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房、1999 年。  
浅田彰・島田雅彦「対談・模造を模造する」『新潮』第 85 巻第 1 号 (1988.1) : pp. 332-354  
油野良子「恋の都」長谷川泉・武田勝彦編『三島由紀夫事典』明治書院、1976 年 : p. 146  
有元伸子「三島由紀夫『潮騒』論」『広島大学大学院文学研究科論集』第 66 号 (2006.12) : pp. 35-51  
和泉正人「わが国の学校保健の歴史について」『学校保健研究』第 7 巻第 9 号 (1965.9) : pp. 43-49  
磯貝英夫「三島由紀夫の『潮騒』」『国文学解釈と教材の研究』第 10 巻第 13 号 (1965.11) : pp. 117-121  
上野千鶴子「解説 (三)」小木新造・熊倉功夫・上野編『日本近代思想体系 23 風俗 性』岩波書店、1990 年。  
奥野健男『三島由紀夫伝説』新潮社、1993 年。  
北原恵「表象の政治学 正月新聞に見る〈天皇ご一家〉像の形成と表象」『現代思想』第 29 巻第 6 号 (2001.5) : pp. 230-254  
九内悠水子「三島由紀夫『潮騒』論——歌島の〈道徳〉、芸術家の〈道徳〉」『広島女学院大学国語国文学誌』第 36 号 (2006.12) : pp. 19-31  
佐藤秀明「〈初恋〉のかたち——三島由紀夫『潮騒』のプロットと語り手」『国文学解釈と鑑賞』第 56 巻第 4 号 (1991.4) : pp. 138-144  
SUN・F (署名) 「牧歌的風景」『週刊朝日』第 59 巻第 27 号 (1954.6.27) : p. 62  
柴田勝二「二つの〈太陽〉——『潮騒』の深層へ」松本徹・佐藤秀明・井上隆史編『三島由紀夫論集 II 三島由紀夫の

- 表現』勉誠出版、2001年：pp. 221-235
- 杉本和弘『『潮騒』——「歌鳥」の物語』『国際関係学部紀要（中部大学）』第6号（1990.3）：pp. 355-364
- 助川徳是「潮騒」『国文学解釈と鑑賞』第37巻第15号、（1972.12）：pp. 118-119
- 高石昌弘「学校保健の変遷」『保健の科学』第45巻第1号（2003.1）：pp. 7-11
- 高倉一『『奇譚クラブ』のこと』高倉一編『秘密の本棚I 縛りと責め 幻の雑誌 1953~1964 の記録』徳間文庫、1998年：pp. 673-676
- 武内佳代「レズビアン表象の彼方に——三島由紀夫『暁の寺』を読む——」『人間文化創成科学論叢』第10巻（2008.3）：pp. 6・1-9
- 武内泰淳「小説案内（上）青春のモラル」『毎日新聞』（1954.6.25）
- 竹村和子「資本主義社会とセクシュアリティ——〔ヘテロ〕セクシズムの解体へ向けて」『思想』第879号（1997.9）：pp. 71-104
- .『フェミニズム』岩波書店、2000年。
- 田代美江子「日本の性教育の歩み第10回 近代日本の社会運動と性教育——廃娼運動と性教育（その4）」『季刊セクシュアリティ』第13号（2003.10）：pp. 148-151
- .「日本の性教育の歩み第11回 敗戦後における純潔教育（その1）」『季刊セクシュアリティ』第16号（2004.4）：pp. 172-175
- .「戦後どのような変化をたどってきたか」『新版人間と性の教育① 性教育のあり方、展望』大月書店、2006年：pp. 26-35
- 千野帽子「解説 恋するすべての女の子へ、応援と励まし。」『恋の都』ちくま文庫、2008年：pp. 308-314
- 寺田透「美しい海の映像 だが講談の人情の卑俗さ」『日本読書新聞』（1954.7.12）：p. 3
- 中島国彦「デルフィの若者、歌鳥の若者——「潮騒」への一視点」『国文学解釈と教材の研究』第31巻第8号（1986.7）：pp. 58-65
- 中野重治「『潮騒』と大人気のない話」『新日本文学』第12巻第10号（1957.10）：pp. 78-81
- 羽鳥徹哉「『潮騒』の話し方と夢」『国文学解釈と教材の研究』第38巻第5号（1993.5）：pp. 74-79
- 花崎育代「三島由紀夫『潮騒』考——麻績王とデキ王子」『湘南短期大学紀要』第9号（1998.3）：pp. 27-35
- 原清 [1952]『受胎調整の衛生教育テキスト』、『編集復刻版 性と生殖の人権問題資料集成 第12巻』不二出版、2003年：pp. 83-100
- 日野啓三「三島由紀夫論」荒正人・伊藤整・小田切秀雄・中島健蔵編『現代作家論叢書7 昭和の作家たち第III』英宝社、1955年：pp. 199-221
- 本田善郎「伊勢音頭考」『藝能』第11号（2005.4）：pp. 137-142
- 松本鶴雄「潮騒」『国文学解釈と鑑賞』第41巻第2号（1976.2）：pp. 120-123
- 三島由紀夫 [1953.3.10]「川端康成宛書簡」『決定版三島由紀夫全集38』新潮社、2004年。
- . [1953.7]「作者の言葉——「恋の都」」『主婦之友』、『決定版三島由紀夫全集28』新潮社、2003年。
- . [1953.10.17]「川端康成宛書簡」『決定版三島由紀夫全集38』新潮社、2004年。
- . [1955.1]「受賞について——新潮社文学賞「潮騒」」『芸術新潮』、『決定版三島由紀夫全集28』新潮社、2003年。
- . [1963.1-5]「私の遍歴時代19」『東京新聞（夕刊）』、『決定版三島由紀夫全集32』新潮社、2003年。
- . [1968.6]「鼎談・デカダンス意識と生死観」『批評』、『決定版三島由紀夫全集40』新潮社、2004年。
- . [不明]「あとがき「潮騒」用」『決定版三島由紀夫全集28』新潮社、2003年。
- 無署名「青春小説三つ」『朝日新聞』（1954.6.21）：p. 5
- 文部省監修・日本学校保健会編『学校保健百年史』第一法規出版、1973年。
- Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge, 1990（ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳、青土社、1999年）。
- Dower, John W. *Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II*. New York and London: W.W. Norton & Co./New Press, 1999.（ジョン・ダワー『増補版 敗北を抱きしめて——第二次大戦後の日本人』上・下、三浦陽

一・高杉忠明・田代泰子訳、岩波書店、2004年）。

Hutcheon, Linda. *A Theory of Parody: The Teachings of Twentieth-century Art Forms*. New York: Methuen, 1985. (リンダ・ハッチオン『パロディの理論』辻麻子訳、未来社、1993年)。

※『潮騒』『恋の都』の引用は『決定版三島由紀夫全集4』（新潮社、2001年）に拠った。